

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学 大学院	社会学	研究科	社会学	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科 博士後期課程 5年次		岸下 卓史 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	社会学部 現代文化学科 教授		阿部 珠理 印		
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	社会
個人・共同の別	個人		・	共同	
研究課題名	メキシコ市ミルパ・アルタ地域の祝祭 fiesta 文化の研究				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科・博士後期課程・5年次		岸下 卓史		
研究期間	2013 年度				
研究経費	(支出金額) 200千円		/ (採択金額) 200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

第一に、メキシコ市の最南部のミルパ・アルタ行政区で、1950年代~1970年代初頭にかけて議論された守護聖人を祝うためのフィエスタが、現在の存続にもかかわらず、都市化・個人主義化・経済的富裕化の影響のため、当時のような顕著な影響力を発揮できていない点を示した。第二に、都市化・個人化・富裕化のため、今日の私的なフィエスタが、親族・友人のみならず、他人をも巻き込む100人、300人の規模で催される社会的動機を論証した。それは、代父母制によって社会関係を築く住民たちが、カトリック的儀礼により社会化されているためだ。フィエスタの無償性を可能とする慈愛の精神は、日本人には理解困難な、神との絆で確立する「自由な個人」から理解できる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[メキシコ市ミルパ・アルタ行政区] [祝祭 fiesta] [共同体的動機と私的動機]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

報告者は、本研究において、メキシコ市、ミルパ・アルタ行政区で、私的な通過儀礼によって動機づけられるフィエスタの調査に従事した。メキシコ市、ミルパ・アルタ行政区(Delegación Milpa Alta)においては、これまでに、アメリカ人文化人類学者ウィリアム・マドセン(William Madsen)、オランダ人文化人類学者ルドルフ・ヴァン＝ザンジーク(Rudolf Van Zantwijk)が現地調査を行い、それぞれ民族誌を著している。これらのヨーロッパと北米出身の研究者が開拓したミルパ・アルタの文化人類学的な民族誌的方法を用いた研究を、1970年代半ばにマルティネス・ルバルカバ(Martínez Ruvalcaba)というメキシコ人の文化人類学者が継承し、ミルパ・アルタ地域(行政区)を構成する12の諸村落のうちの一つで、行政区庁舎所在地であるミルパ・アルタ村(Villa Milpa Alta)の経済面での生活実態、祭礼組織(Mayordomía、マヨルドミア)の活動、聖地巡礼、当地域を先住民共同体と見なすか、もしくはメスティーソ農村と見なすかという研究諸項目に取り組み、欧米の文化人類学者と同様に、民族誌を著した。

彼女が1970年代の調査・研究の末に下した結論とは、以下のようなものである。まず、当地域は伝統的な慣習は、マドセン、ヴァン＝ザンジークがフィールド調査を実施した1940年代、1950年代末と比較すれば減退しているものの、なおも盛んに実践されている。けれども、固有の言語としてのナワトル語(Nahuatl)の使用者の激減(彼女の時代の統計で10%程度。二言語話者・単一言語話者両方を含む)、電気・上下水道・ガス等の使用に伴う生活様式の変化、ラジオ・テレビ等のマスメディアの徐々の普及と小学校教育の一般化による文盲率の激減に見られる一連の大きな社会変動のために、ミルパ・アルタは先住民共同体と見做すことができない社会に変わってしまった。

報告者は、マルティネスの研究成果を参照しながら、そして、彼女が調査・研究に従事した1970年代半ばのミルパ・アルタ村の慣習として、共同体レベルの祝祭＝フィエスタに代わる(あるいは、共存している)、個々人のレベルでのフィエスタの開催に念頭に置きつつ、1ヶ月間という比較的短期間を用いて、調査・研究に従事した。その結果、今年度に、本研究費に依りながら、メキシコ市の現地調査を通じて明らかになった知見とは以下の通りであった。

まず、当該地域においては、個々人の祝い事を理由とした各世帯のレベルでのフィエスタが主としてカトリックの通過儀礼(洗礼式[bautizo]、聖体拝領[primera comunión]、堅信式[confirmación])との関係で実施されており、その頻度や規模は共同体レベルのそれにひけを取らない慣習として地域に根づいている。個々人の祝い事とは、具体的には、ミルパ・アルタではメキシコの他の地域と同様に、カトリック教会によるキリスト教信仰が浸透しているため、カトリックの教義が定める通過諸儀礼を指す。地域にはノパル(nopal、食用のウチワサボテン)生産や地域の流通独占で財を成した中流かそれ以上の所得を持つ住民が多く暮しており、彼らが年に1回、3回、5回という頻度でもって日本円換算で20万円、50万円、100万円を一回で消費するフィエスタを催している。

次に、本年度の短期調査以前の現地調査のデータと照らし合わせると、ミルパ・アルタ地域では、各世帯のレベルで開催されているフィエスタは100人、200人、場合によっては500人以上の住人を対象に無償で実施されている。だが、これらの慣習はメキシコ市の中心部、すなわちより都市的な生活様式が普及している、(ミルパ・アルタが保持しているような)先住民文化と関わる慣習が消失した他の行政区においては観察されないという事実が指摘される。ミルパ・アルタのようなメキシコ市にありながら農村的特徴を残す行政区とは異なり、メキシコ市のより都市化した部分では有料の業者企画型のフィエスタか、比較的少数の親しい人々のみが会合するフィエスタが催されている。都市部では、ディスコ等でパーティが開催されていることも、今日、メキシコのフォークロア(民俗文化)としてのフィエスタが都市部で衰退していることの反映である。最後に、そうしたフィエスタの二分化が、地域における集合性の二分化として解釈することが可能であると論じた。

研究成果の概要 つづき

今日のミルパ・アルタではマルティネスの時代以上に個人主義が浸透している。その個人主義の浸透は都市文化の強い影響の結果と見做せるが、それがミルパ・アルタの伝統的な共同体や祭礼組織を単位としたフィエスタが再生産されている状況と深刻な衝突を引き起こすことなしに共存している。なぜなら、第一に私的なフィエスタの開催者たちは個人的なフィエスタを重要視しているが、同時に地域の従来祭礼上のフィエスタにも尊重を払いつづけているからである。そして、第二に、私的なフィエスタ自体が、都市化の進展した地域において小規模に無償で、あるいは大規模に有償で催されているフィエスタとは異なるためだ。そして、第三にミルパ・アルタではカトリックの通過儀礼が他の行政区以上にきちんと遂行されている。この 3 つの要因が、文化人類学者ジュリアン・ピットリバーズが論じるキリスト教に基づく自由意思が代父母制を通じて成立するのだが、この自由がミルパ・アルタにおいて支配的であることを説明する。

キリスト教は慈愛に基づく分け与えの重要性を説く。カトリックの洗礼式では実の両親は、名付け親になることは出来ない。これは、実の両親が実子を社会化して集団の成員として人間を創り出すのに対し、名付け親を果たす代父母は、教義上、その子どもを神との繋がりであり自我を持つ者として人間を創り出すのだ。実の両親は個人に血のつながり、生まれた共同体との結合を保障するが、霊的な繋がりやカトリックの教会儀礼において代父母をつうじてのみ保障されるのである。

このキリスト教の博愛主義と、代父母制による個の確立が、ミルパ・アルタにおいて私的なフィエスタを、単にエゴイズムに基づくものではなく、無償という仕方で共同体的フィエスタと同様に、分け与えの特徴を持たせている理由なのである。

この私的なフィエスタの存在は、マドセン、ヴァン＝ザンジーク、マルティネスの民族誌が研究対象としてきたようなものとは異なる民族性の存在を示唆する。地場産業が発展し、中流階層に含まれる世帯の数が増加し、都市文化がミルパ・アルタで受容される結果として、人々の言語・慣習・価値観の変容は生じている。しかし、そのような変化した状況で、彼ら自身を外部の社会と境界づける意識が活性化し続けていることが、伝統的なフィエスタと、無償性を帯びた私的なフィエスタの実践から確認できるのである。

以上のような分析をつうじて、報告者はフィエスタ文化の分化をめぐるミルパ・アルタの状況を、先行の研究者たちの民族誌との関係で研究した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

現在、報告者が博士論文を執筆中であるため、上記の①～④に該当する形式で、研究経過・成果の報告を行っていない。新年度に、博士論文を提出する際に、今回の調査で得られた成果を組み込むと共に、日本ラテンアメリカ学会の大会で、今回の調査に間接的に触れるような研究内容を報告する予定である。